

どふにかごまかしかつくさうである。成程、素人の踊や舞を見ると手は可なり振つて居るが脚がちつとも動かない、腰もとが甚だ醜い。

蓋し人體の姿勢に一大影響を迨ぼすものは、上肢の運動でもなければ頭の動かし方でも無い、實に下肢の運動である。踊や舞を觀て居ると、色々な美的姿勢が出て来るが、其等の美的姿勢は主として兩脚の位置と運動とから生じて来る様だ。踊や舞の中で最も美術的に發展したものは能であるが、能の姿勢美は専ら脚に存して居ると思はれる。即ち其の立ち方や、其の歩み方や、跨いて突撃の狀を現はすなどは能に於ける姿勢美中の最も美なるものであるが、而も此等の姿勢は盡く脚の位置と運動とに因るては無い。試に第二十三圖を看よ、左右に比して中央なる舞妓の姿勢が悪いのは、全く脚に運動が無いからだ。

日本人の體形の美を賊ふものは脚の短かさに過ぐる事であるが、此と反對に西洋人の體形の美を成すものは脚の長き事である。之を以つての故

に、日本人の運動美は、下肢の位置や運動に因る姿勢美よりも、上肢の位置運動に因る態度美に存して居り、西洋人の運動美は上肢の位置や運動に因る態度美よりも、下肢の位置運動に因る姿勢美に存して居る。換言すれば、日本人の運動美は坐的であつて、西洋人のそれは立的である、一は寧ろ靜的であつて、一は寧ろ動的である。かの能の姿勢美はもとより美的であるが、未だ茶の湯の態度美の美的なるには若き追はぬ。恰かも西洋人の態度美が到底舞踊の姿勢美に若き追はぬ如くに。

西洋人の姿勢運動美は其の特長を最も能く舞踏に發揮して居る。肉附の格好のよいのびくした長い脚を、前後左右に自由自在に動かして、種々の姿勢と種々の運動とを起す所は、實に人體運動の極致を盡して居る。かの美學の大家ワグナー氏をして、人體の活動を表彰することを藝術の最上乘なれと謂はしめしもの、正に西歐の人體に於いて是を見るではないか。

(C) 表情的運動美

表情的運動美とは演劇即ち芝居に現はるゝ運動美である。演劇には手の運動なる態度美や、足の運動なる姿勢美も、無論必要ではあらうが、其れよりも更に重要なものは顔面の表情である。

いふ迄も無く劇の本旨は人物の性情人格を舞臺上に表現するにあつて、かの所作事や立ちまわりに至つては、此の性情人格を表現す可き一種の手段に過ぎぬ。即ち表情的運動美は劇に於ける生命神髓で有つて、姿勢的運動美や態度的運動美は其の附屬物景物である、例へば子別れの場には悲哀の情を能く表はし、對面の場には喜悅の情を能く表はし、其の他憐愛、忿怒、嫌惡、歡樂等それらの情緒を圓滿に表はすのが、踊や舞に於ては決して見る事の出來ぬ劇の特質で有るのだ。

而して此等の表情は、態度や姿勢でも幾分か表現する事は出來るが、單に態度や姿勢のみでは未だ充分で無い。必ず顔面の表情を待たねばならぬ。

と謂ふても、顔面の表情ばかりでもいかん。つまり顔面の表情を本とし中心とし、此に態度や姿勢を適宜に調和せしめて、始めて劇の表情美は成立するのである。故に吾人は單に表情美とは云はぬ、これに運動なる語を附加して、表情的運動美とは云ふのである。

表情といふたとて、必ずしも情緒を表はすのみが表情では無い。師直は師直としての貪慾を表はし、由良之助は由良之助としての誠忠を表はし、殿様は殿様らしく、武士は武士らしく、傾城は傾城らしく、女中は女中らしく、凡てそれらの品位人格を表はすのは又表情美の一種である。此の點に於てかの故團十郎の得意で有つた腹藝なるものは、蓋し表情的運動美の最も能く發達したもので有らう。

或る老優が後進に訓へていふに『お姫様になつた時は、庭先に下りて梅の花を見てもすぐに梅が咲いたとはいはぬ、まづ腰元にこの花はなんじやいなアとかなんとか問ふのだ、そこで御見物が高貴な御人だと見て下さる。

又同じく老人になつても、與一兵衛の様な賤しい身分ならば杖を握るに上を少し出して握る、鬼一法眼などは上に親指をかけて握るから品格が高く見える、云々』

第四編

人體美を助成するもの

第一章 音聲

人體美の本質、即ち人體美とはどんなもので有るかは畧々以上に説き盡したから、次には人體美の本質では無いが外部に在つて人體の美を助け成すものを論じて見やう。

人體美を助成するものゝ内て第一注目すべきは蓋し音聲である。音聲の美は美學に所謂聽覺上の美で、第二編第一章参照、是れが視覺上の美同じく第二編第一章参照を助成することは最も著しい事實だ。近い話が、若し踊や舞や活動寫真から鳴りものと樂隊とを離すと彼等の面白味の八分通りは消えてしまふ。音と形色かたどとの調和は見遁す可からざる美觀上の一問

題である。

人體の音聲を美的に分類すると男性的及び女性的の二となる。男性的とは寧ろ調子低くして強い聲、女性的とは寧ろ調子高くして弱い聲。前者はどちらかと謂へば濁みだ地聲であつて、後者はどちらかと謂へば清んだ甲聲である。而して男性的音聲は男子には適應するけれども決して女子には適應しない。それと同じ様に女性的音聲は女子には適應するけれども決して男子には適應しない。

かの島田喋郎氏の聲は頗る有名なもので有るが、あんな調子の高い『黄な聲』は寧ろ女性的の音聲であるから決して男性なる島田氏の人體美を助成する譯のものでは無い。若し島田君の聲が島田君の品位を高めるなど思ふものがあれば、其の人はまだ人聲に對する美的教練を経ないものと云はずばなるまい。歴史や傳記に屢々ある『音吐朗々』と稱せらる英雄の聲は、上調子な弱々しい黄な聲では無い、寧ろ低調な強い幅のある重々しい

聲であらう。黄な聲は徹頭徹尾男子の體美と相關するもので無い。

けれども女子の聲は甲走つた黄な聲でなければいかん。如何に花顏玉歩ても如何に沈魚落雁でも、其の聲が大きな濁つた荒々しい聲では到底美人の末班にも列する事は出来ぬ。げに音聲は婦人の體美と最も親密なる關係を有するもの、女性的の聲が男子の品位を傷くるよりも、男性的の聲が女子の美を賊ふ事は更に甚だしいものが有る。だから其の逆で、清らかならうるはしい聲の婦人が『遊ばせ言葉』で流暢に應對する時は、聲音の美が實に對手を酔はしめる事が有る。今は昔、本郷臺に雜誌屋の評判娘などはたしかにその一例であらう。

『遊ばせ言葉』!!! 言葉遣ひの上品と下品とは、男子の品格にはさしたる影響もないが、否な野鄙粗朴なる言葉遣ひは時として男子の品格を高める事が有る、九州育ちの軍人が薩摩辯を遣うて其の朴訥なる性格美を發揮する事は小説や新演劇で讀者諸君の先刻御承知のところ、女子の品位には最も

重大なる影響が有る。諸國から東京に出て来る男女學生を比較して視給へ。男學生は比較的長くその地方語を使用して居るが、女學生となると一朝にして東京言葉に轉化してしまふ。是れ必竟簡潔洒脱な東京言葉が其の品位に聯關すること、女學生の方遙かに男學生よりも多いからである。盲者が美人と醜婦とを區別するには、音聲と言葉遣とに依るさうだが、成程至極尤な事と思ふ。襖越しに聞いた唳轉たる聲に慄るゝは吾人も時に逢着する事では無いか。

一九が琴の畫の自賛に、

もの一重へだて、聞けば十七の

鬼がひくとは見えぬつまごと

音聲や言葉遣ひに附帶して婦人美を助成するものに尙ほ音樂が有る。元來ミュージカルサウンドが人の感覺を刺激するは、形の釣合や色の調和よりも一段と其の度が強いから、美人が絶妙の音樂を奏する時は人をして

眞に恍惚ニヒクの境に遊ばしめる事が出来る。此の點に於て吾人は大に美人の音樂家を得んことを欲する。不完全不充分ながらも、娘義太夫が今の社會に流行する一因は、確に婦人の音樂的音聲美が賞鑑せらるゝ現象てがな御座らうか。

音聲、言葉遣ひ及び音樂に比較的訓練を積んだ女性は藝妓で有る。藝妓は賤業者として今の倫理道德家からは甚だしく擯斥せられて居るが、音聲言葉遣ひ、遊藝、さては化粧の仕方、衣服の着様、立居振舞など、凡て美と云ふ方面から觀察すると今の婦人社會に一頭地を抜きん出て居るものは藝妓である。堂々たる大勳位公爵から教育の上長たる大學の教授に至るまで、半夜密に馬車を狹斜の巷に驅つて花に攀ぢ柳を折られるのは、強ち肉慾ばかりでは無い、又ポリッシュした婦人美を賞鑑せられむが爲て有らう。と云ふたとて、著者は何も公爵や教授からビールの一ダヌも貰うた譯では無い、又此んな事を書いて置いて後日の言譯の種にしやうなど云ふ野心も夢々

無い……一寸旗色を鮮明にして置く……
大阪で評判の八千代などは、容貌に比して聲音美の缺けて居る一例であ
らう(唄ひ聲ではない地聲が)。

古來婦人の聲音美や音樂美に惚れた英雄は尠く無いだらう。義經の靜
に於ける五郎時致の少將に於ける、潯陽江頭の白樂天も其の一例。

更に之を演劇に仕組んだのは「阿古屋の琴責め」。絶世の美妓たる阿古屋
の三曲にうつとりして袖を焼いたのは豈獨り岩永左衛門のみならんや。
重忠の如きはイヤに虚榮張つて居るもの、内心の恍惚は蓋し袖を焼く以
上て有つたのである。

詩人は音樂を借りて過去の婦人美を追懷せしめる事が有る。朝顔が琴
唄によりてありし昔を駒澤に訴ふる「琵琶行」の美人が琵琶をかなて、青
春の樂しかりしを忍ぶなど殆んど枚舉に遑あらずである。

「コリヤ〜女太儀ながら其の朝顔とやらの歌サ、早くうたふて聞か

せいと望む心は千萬無量。知らぬ岩代類ふくらし、扱々駒澤氏にはイ
ヤモきつい御執心、コリヤ〜目くら何なりともエ、諷へ〜サ、早
く〜ハイ〜〜諷ひまするでござりますと、こがる〜夫の有るぞ
ともしらぬ目くらの探り手に、戀ゆへ心盡し、琴誰かは憂きを斗爲巾の
糸より細き指先に、さす爪さへも八ッ橋のやつれ果てたる身を、こから
涙に曇る爪しらべ、露のひぬ間の朝がほの照らす日かげのつれなきに
哀れ、一ひら雨のはら〜とふれかし。ム、夫を慕ふ音律の我々が身
にも思ひやられて思はずも感涙いたしたのふ岩代殿。いか様、琴とい
ひ器量といひイヤモ中々感心仕る。

(朝顔日記宿屋の段)

駒澤が涙に咽ぶは怪むに足らず、縁もゆかりも無い岩代まで、朝顔の琴を
聞いて、其の過去の閱歷を想ひ其の過去の美しかりしを偲び、轉々感慨に堪
えざるものあるにあらずやである。

更に「琵琶行」に到つては、

輕攏慢撚抹復挑
 大絃嘈嘈如急雨
 嘈嘈切切錯雜彈
 間關鶯語花底滑
 水泉冷澁絃凝絕
 別有幽愁暗恨生
 銀瓶乍破水漿迸
 曲終收撥當心盡
 東船西舫悄無言
 沈吟收撥插絃中
 自言本是京城女
 十三學得琵琶成
 曲罷長教善才服
 初爲霓裳後六公
 小絃切切如私語
 大珠小珠落玉盤
 幽咽泉流水下灘
 凝絕不通聲暫歇
 此時無聲勝有聲
 鐵騎突出刀鎗鳴
 四絃一聲如裂帛
 唯見江心秋月白
 整頓衣裳起歛容
 家在蝦蟆陵下住
 名屬教坊第一部
 妝成每被秋娘妬

五陵年少爭纏頭
 今年歡笑復明年
 弟走從軍阿嬈死
 門前冷落鞍馬稀
 商人重利輕別離
 去年江口守空船
 夜深忽夢少年事
 一曲紅綃不知數
 血色羅裙翻酒污
 秋月春風等閑度
 暮去朝來顏色故
 老大嫁作商人婦
 前月浮梁買茶去
 遠上明月江水流
 夢啼粧淚紅闌干
 秋娘をして羨ましむるに足る、五陵の少年は争て思を懸け一曲毎に纏頭は
 山を成す。而も青春徒に過ぎて、黄白是れ命とせる血なき涙なき商人の妻
 となり、夫の留守を獨り空船に明し暮せば、明月皎として江水寒く、三更青春
 の往事に想到して紅淚闌干たりと云ふもの眞に斷腸の言。而も此の追懐

(白居易)

談は彼の女が青春の時も同じくかなたしその琵琶の音によりて感入なるにあらざや。由來音樂は過去を再現するに色をつけ形を附し血を注ぎ涙を與へ殆んどドラマチックに髣髴せしむる。トーマス・デクワインシーが、

音樂は尙ほ花毛氈の如し。音樂が人をして過去を追懷せしむるや記臆的追懷と異りて色あり形ある過去を腦裡に畫かしむ。

(Confess to us of an English Opium Eater.)

と言ひしものまことに至言と謂ふ可してある。

彼の山陽先生の戯作として有名な、

・三味線とつて爪弾も、ありし昔を忍び駒は、琵琶行の翻譯なりとかや。

第二章 裝飾

裝飾とは平たく謂へば身仕舞の事、主として婦人の體美を助成するのである。之を二大別して化粧と服裝とにする、清の李笠翁の「閒情偶寄」に表はれたる文字を用ゆれば修容と冶服とである。

(A) 化粧(修容)

化粧の中には白粉を延ばす事點染と、髪を結ふ事と、香水をつける事(薰陶)との三が有る。

白粉は古く持統天皇の時既に存在して居たとも謂ひ(持統紀六年閏五月)又其よりも古く雄略天皇の時存在して居たとも謂ふ(雄略紀七年)。何れにしても奈良朝の婦人は儘に白粉をつけたに相違ない。吾人の先祖も齋分おしゃいで有つたと見える。

白粉を美的につけるには中々の熟練と工夫とを要する。無闇に厚く白く所謂白壁流に塗りつけても、其れて器量きりやうが引き立つものには無い。第一、生れつき色の白い人と黒い人とは其のつけ方を違えねばならぬ、又生れつき青み黄みを帯びた色の人と赤みを帯びた色の人も其のつけ方を違えねばならぬ。色の黒い婦人は白粉を白くつけ、ける必要も有らうが、色の白い婦人若くは青み黄みを帯びた婦人は白粉を白くつける必要は無い、此の種の婦人は白粉を櫻色おうしきにつけねばならぬ。同じ白くつけるにしても、色の黒い婦人と赤みを帯びた婦人とは違ふ、黒い方は赤い方よりも其の白さを烈しくせねばならぬ。

第二、同一の婦人でも額とか、鼻筋とか、眼もととか、口もととか、其の他首耳などによりて白粉のつけ方を違えねばならぬ。廣い額を狭く見せ、低い鼻を高く見せ、大きな口を小さく、小さな眼を大きく見せるのは一として、點染の作用に待たぬは無い。

第三、白粉は一回に厚くつけるよりも薄く二回にも三回にもつけるが秘訣。此れは今日我國の婦人社會でも行ひつゝあるが、かの芥子園畫傳の著者たる李笠翁は清初の當時已に此の事を支那婦人に推奨した。

從來傳粉之面、止耐遠觀、難于近視、以其不能勻也、畫士着色、用膠始勻、無膠則研殺不合、人面非同紙絹、萬無用膠之理、此其所以不勻也、有法焉、請以一次分爲二次、自淡而濃、由薄而厚、則可保無是婁矣、(中略)、今以一次所傳之粉、分爲二次傳之、先傳一次、俟其稍乾、然後再傳第二次、則濃者淡、而淡者濃、雖出無心自能巧合、遠觀近視無不宜矣、

斑まだらなく一様に白粉をちらすには是非此の方法を使用せねばならぬ。

第四、其の他眉を引く事、鐵漿てつじやうをつける事、唇くちびる、爪つまなどに紅べにをさす事など何れも此の點染に屬する。就中、鐵漿をつける事は鳥羽天皇の頃から始まり、當時婦人は勿論、男子も堂上の諸臣は盡く之を行ふた。降つて徳川時代に

は涅齒が遂に鐵漿初めと云ふ一の儀式とまで成つた。けれども涅齒だけは美觀上にも生理上にも共に好いものでは無い。明治六年法を以て之を禁止したのは吾人も大に賛成する。

〔因にいふ、一説によると、涅齒は本邦固有の風俗で支那の古書には黒齒國在東海中などの文字あり。又日本人種は南洋から移住したもので、南洋人は檳榔の實を嚼むが故に其の齒は黒く唇は紅、日本人の涅齒口紅はつまり南洋人の風を傳へたものだとのこと〕

あまり考證にのみ流れて、少し實用を遠ざかつたから、此處で一つ實用新案の極秘を傳授しやう。

『……どうも熱心といふものは恐ろしいもので、成程鼻も高くは成りにならないし、前額も低くは成りにもならないのですが、顔の地の色の薄い紅色と白粉の白色との分布の加減——即ち或所は白粉が濃く或所は淡いために、平面の物にも陰影を描けば凸凹の見えるやうな道理で、幾干か鼻も高くなり、前額も低くなつて見好げに見える

様になりました。往時希臘の畫家には婦人の面に彩色を施して與つた者があつたと聞きましたが、たゞの婦人が自ら粧つてさへ美しくなるのですから、成程畫才のあつて畫技に長けて居る人が化粧を仕てやつた日には、何の位婦人の美を増すものか測られた譯のものではないと思ひましたネ。

平面の紙なり板なりに木炭や鉛筆でもつて描いてさへ、眞に自由に凸凹のあるものゝ美女なら美女の顔、醜婦なら醜婦の顔——を現はすことが出来るのですから、まして實際に幾許かの凸凹のある人間の顔の上に、白粉や燕脂と白粉の混合物やなんぞを塗る、その塗り方を少し技術的に研究すれば、普通の女が一寸した美人になる位の事は左程むづかしくない筈で、またさほど不思議でもない筈の事です。俳優の様に青黛や黄土を用ゐないまでも、白粉といふ有力なものを用ゐれば何の様にも見せる事の出来る筈で、特に顔の色が白くない人種と來ては、

白粉と皮膚の色との差が大きい丈それだけ容貌を繪畫的技術で人の眼にだけ變化させる事は自由が利く道理です。光線を吸収する色の部は低く見え、反射する色の部は高く見えるのですから、其道理に基いて工夫さへすれば何様にても成る譯でしやう。ですから繪心のある婦女はどうしても顔のこしらへが上手ですし、それからまた舞踊を習つて自分の顔を繪畫的に塗りくるめる實驗を有つて居るものは、いくら化けることが上手なやうです。……同じ人の容貌でも膨れて居るのや悄然として居るのと、機嫌のよいのや氣の張つて居るのとは大變な相違です。……一體女が此自分の心持でもつて自分の容貌を好くしたり悪くしたりする事は非常なものだと思ひます。枝蛙の色の變つたりなんぞするのも随分早いものですが、先づ女の氣合が變る途端に女振りの上つたり下つたりする位速く變るものも滅多にあるまいと思ひます。ケロケロケロと幾聲が鳴いたかと思ふと既に

鶏冠の色が變る吐綬シロカシマ鶏トビです。ア彼にても比べる外には比べものも無からうと思ひます位で――

凡そ婦人たるものは顔貌を美にする化粧法に二色あつて、一つは燕脂白粉を塗り付くる物理的化粧法で、他の一つは心理的化粧法であるといふのです。』

(以上各節、不感庵——露伴)

これは實に名家の名言であらう。諸君が試みに春から夏、秋の初の頃、村の祭禮、又は都會の地でもお盆のお賽日などに、身分相應に著飾つた若い女の顔に注意して見たまへ、必ずその中の幾十パーセント或は過半は此適用を誤まつて居る。

即ち所謂三平二滿の御面相に、無茶苦茶に塗り付けた白粉が、安もの、手巾や汗手拭で無闇と顔を撫でる結果、高い部分は剝落して地金の赤銅色や四分一色が露出する。そこで白粉は彼地此地の谷合や岩間にのみ、春の遠山の殘雪の様に停滯して居る。それが「光線を吸収する部は低く見え、反射

する部は高く見える』科學上の理法に因つて、赤銅四分一の山は低くなり、殘雪の谷は高くなつて平々坦々、優に三個師團の大兵を露營せしむるに足るの感がある。

化粧の上手な例は、著者の郷里のさる名家の愛娘で、菊石も菊石も黒菊石の鼻低の不器量ものが、それが爲に奮發したか女の道一通りは勿論、香茶の湯、遊藝一切にも堪能で時の大江戸の奥向に上つて遊藝で勤めた、數年の後錦を著て故郷に歸つた時は變つたも變つた全然別人になつた。即ち物理的、心理的化粧法の妙に達して巧に人の眼を瞞ましたのだ。爾來は此土地一般の花嫁修飾掛として、幾多の少女に心からの感謝を受けて極樂往生を遂げたとやら。

心理的化粧法の實驗は、積極には戀人もしあらばの笑顔、消極的には御愚妻もしあらばの膨れ顔に、徴したまへ呵々。

點染に次ぐ化粧法は髪を結ふ事、即ち結髪である。凡そ日本婦人の結髪

ほど美的に發達した裝飾法は又と世界に其の類例があらうとも思はれぬ。其の光澤くしい漆黒な色、其の曲線の配合を極めた形、其の左右の對稱。殆んど人工的美妙の有らん限りを盡して居るのでは無いか。心ある西洋人等は、此美妙なる結髪を捨て、蓬々たる廂髪を喜ぶ日本婦人の心事を付度するに大に苦んで居るといふがげにさも有る可しである。流行とはいひながら實に情ない次第ぢや。

俚諺にも『髪は女の命』と言ひ又『女は顔より髮形』と謂つてある通り、髮の結ひ方が婦人の美醜を支配する事蓋し意料の外にある。されば平安朝では、艶やかな長い髪を有つて居るもの即ち美人と考へられ、身の丈より二三尺も長い黒髪のものさへ屢々有つたとは、當時の物語草紙などに載つて居る所である。(實際殘存して居るのがあるから慥かだ、伊豆の大島の女などは今も丈に餘る黒髪を大切に居る)。其の上髮の結ひ方は、奥様であるか、お嬢様であるか、乳母であるか、下女であるか、つまり婦人の身分素姓

を表示するものであるから婦人に取りては最も重大な裝飾術と謂はねばならぬ。

風俗史を案ずると上古では男は結髪にして女は垂れ髪。後奈良朝は武天皇の時男女共に結髪す可しとの詔が有たが女は矢張り垂髪て居たらしい。文武天皇の時再び結髪令が出たけれども而も幾何もなくしてすたれ平安朝より藤原武家時代を通じて徳川の初世迄は女は大抵垂髪て有つた。所が慶長の頃ほひより結髪が風が漸く行はれ寛永を経て元祿に至り更に享保寶曆に入りては結髪風益々盛に其の種類も實に百數十種の多きに達した。此く多數の結ひ方が有るものゝ其の形及び人によりて此を四種の系統に分類する事が出来る。

- 第一、兵庫鬘の系統
- 第二、丸鬘の系統
- 第三、島田鬘の系統

唐輪鬘



此の圖は安永八年京板當世から
じ離形といふ書より復寫中びん
ひしつとよこひやう

兵庫鬘



元祿元年板女用
剛索鬘に
此圖あり

山かたとり
びんにすきつと
むすび立ひやう



圖四十二第

片外
此圖は文政十丁亥年鼻山人
珍説豹三卷の寫なり



武家妻
此圖は文政十丁亥年鼻山人著
珍説豹之
卷の復寫
なり



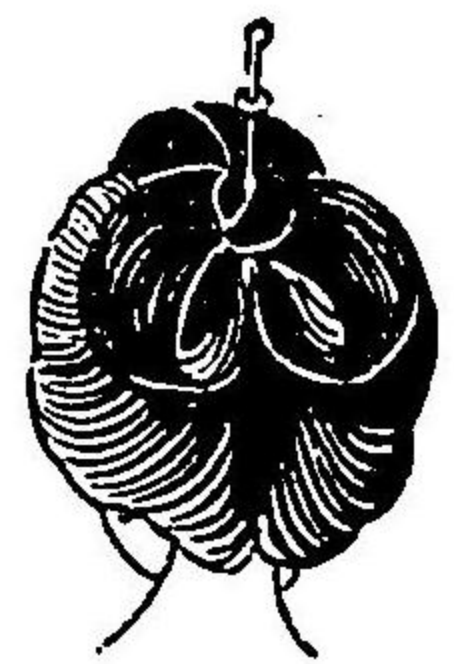
勝山
此圖は明治二十二年風
俗圖報の寫なり



武家妻
此圖は明治二十二年風
俗圖報の寫なり



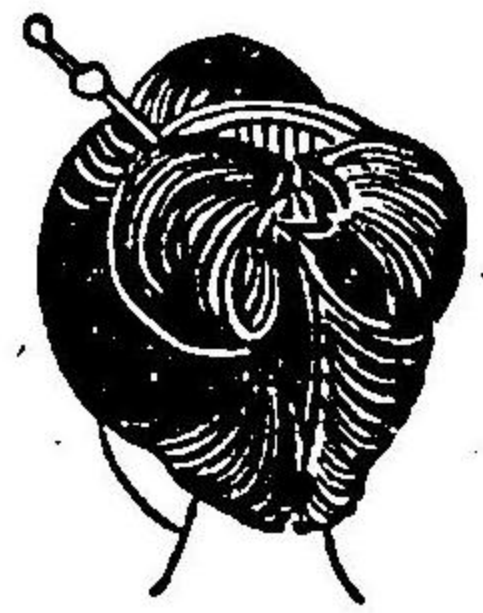
圖 五 十 二 第



天神



桃割れ



銀杏返し



ふくらざん

第七十二圖

第四、銀杏返しの系統

是れて有る。

兵庫鬘は慶長の末つ方攝津兵庫港の遊女が結び始めたもので、井筒女之助が結うたあの唐輪鬘から轉化したとの事。その唐輪鬘は更に筋鬘から來り、して筋鬘は今日の結髪の源泉で有るとの事。兵庫鬘は主として遊女社會に流行し、其の全盛期は寛永頃で有つたが、今日は全く其の跡を絶つてしまつた。此の系統に屬して今日も行はるゝものは、唐人鬘三つ輪、煙草盆等であらう(第二十四圖參照)。

兵庫鬘に次で起つたのは勝山鬘である。勝山鬘は高尾と時を同じうした吉原の遊君勝山なるものゝ創案に係る所、多く承應より元祿に亘つて流行した。後延寶年間に、此の勝山鬘から脱胎したのが即ち今日の丸鬘有る。ふき輪、下げ下地、片はづしなどは勝山鬘の前驅で有つて、諸種のかうがい鬘は勝山鬘と丸鬘との過渡を示して居る(第二十五圖參照)。

勝山齋に次て起つたのは島田齋。こは寛文の中頃、東海道島田宿の遊女が結ひ出したもので、島田くづし、毛卷島田、大島田、やつし島田、なげ島田、文金島田などは何れも此の派に隸屬する。島田齋は上下貴賤を問はず、主ばら娘仲間にもてはやされたもので有る(第二十六圖參照)。

銀杏返し一名新蝶々齋は何時出來たものか其の年代は明らかで無いが、兎に角、島田齋から分岐した事だけは争ふ可からざる事實である。兵庫齋や、丸齋や、島田齋と異つて、其の行はれる範圍が頗る廣い。娘も結へば年増も結ふ、下女も結へば奥さんも結ふ、時には藝者の頭にまで乗るのは、此の銀杏返しの特徴で有る。天神、ふくら雀、桃割れなどは皆此の銀杏返しの変態と見て差岡無からう(第二十七圖參照)。

さて此等四派の美的價値は如何と云ふに、兵庫齋は齋が稍々高く突起した所に一種派出やかな奇抜な趣が有り、丸齋は齋のゆつたりと座りのよい所に落ち附いた風がある。島田齋の齋がひつ付けた様で何となく取れそ

うに見えるのはやが浮華艶冶の相ある所以であらう。若しそれ銀杏返しに至つては何の特相も無く淡として恰かも水の如しとも謂ふ可き歟。

兵庫齋が艶なると共に何處となく雄々しき風あるは是れ遊君傾城にふさはしき所、島田齋が婀娜つぽく浮々して見えるのは是れ娘連中に喜ばるる所以。丸齋のひたすら品位のみなるは最も好く妻たるものに適し、銀杏返しの地味にして特質無きは何人にも似合ふ基である。此を色に喩ふれば兵庫齋は眞紅にして丸齋は純白、島田齋は桃色で銀杏返しは鼠色。若し島田齋を櫻に擬し銀杏返しを菊に擬し得可くんば、丸齋と兵庫齋とは正に水仙と牡丹とに擬し得可きて有らう。

瘦せた女にも肥えた女にも、長顔の女にも、丸顔の女にも、大概の女に好く似合ふのは銀杏返しである。銀杏返しに次て誰にても好く似合ふのは丸齋である。之に反して似合の困難なるは島田で有るから、可なりの美人で無い以上島田に結ふ事は嬢さん達の問題で有らうと信ずる。兵庫齋は中

々趣のある結ひ方と思ふが、惜い事には中絶して今行はれ無い。二三年前元録風の再興と稱して一時新柳二橋の巷に復活せられたが、間もなく消滅してしまつた。誠に残念な事である。

何の髪によらず、大に注意すべきは髪かみの搔かき方である。その人の顔の長短廣狹を、如何様にも補ふて見せるのは實に驚く程である。大に研究する價值がある、婦女たるもの豈忽諸に附すべけんやであらう。

髪の話が思はず長くなつて、定めし讀者は倦怠せられた事て有らうが、次には月經論と云ふ頗る嶄新なる所を御耳に達するから、今暫く御心棒が肝要。

化粧の三分子中點染と結髪とを語つたから、次には残る一の薰陶くわうたうを簡單に述べる。

歴史に依ると、推古三年沈香が淡路に漂着したのが我國に於ける香の始めとしてある。降つて奈良朝では香を炷して室内衣服佛前などを薰陶し

たものらしく、現に東大寺の正倉院には當時の沈香檀香などの名香が藏めて有るのを見ても分かる。更に平安朝に至つては、髪や衣に名香を焚き込めるのはいふ迄もなく、掛香かかぢ誰か袖など稱して匂ひ袋を身につける事も案出せられた。又此の頃より各種の香を焚き、薰によりて其の香の名を謂ひ當てる香道かうだう即ち香合かうがはせと云ふ一種の高尙な遊戯までも起つた。慈照院義政は頗る香道に熱中し、諸國より名香を選出せしめて五十種をば得、是を古代名香十一種に加へて六十一種の名香を定めたとしてある。其の他、武士が戰場に臨むに際して兜に香をこめる事、徳川末期の婦人が腕守と唱へて腕に匂ひ袋をつけた事など、惟うに香水制度は随分能く發達して居たものと見える。

名香の馥郁たるは嗅覺上の美で、第二編第一章参照、此が人體美を助成することは今更くどくしく述べずともだ。が併し、此に一つ注意して置き度いのは、色に寒温の別が有る様に、香にも寒暖のけじめが有る事である。

例へば今日の香水に就いて言はうか。千花香水、ヴァイオレット香水などは随分濃厚な漆濃い馨りてつまり暖香に屬するから、此れは夏向きの香水ではない、冬向きの香水である。此に反してラッエンダーやフロリダなどは、極涼しいアツサリした匂ひで、寧ろ寒香に屬するから、此れは冬向きで無くして夏向きで有る。此の呼吸を飲み込んで居らず、香水なら何でもよいと思つて、漆濃い暖香を夏匂はせたり、涼しい寒香を冬匂はせたりしては、快感を惹起する段では無い、却て悪感嫌感を惹起する。我國の香道にも此の事があつて、春夏秋冬によりて焚く可き香と焚く可からざる香と有るは、普く人の知る所であらう。

香及び香水の目的は、悪臭を去りて芬々たる薫を身體につけるにあるが、或る婦人は香及び香水によらずとも、自然に一種の薫香を有つて居る事が有る。其れは何かといふに月經で有る。先に月經論と言ふたは即ちこれ。

此の事は著者が嘗て心理學專攻の某文學博士から聞いたので、極めて眞

面目な話で有るから其の積りて讀んで貰いたい。

生理學上から論ずる時は婦人の月經は其の交尾期を示して居る(御婦人諸君にはちと失禮な申分知らねが)。四足動物に四土用の交尾期が有る如く、婦人には一年に十二回の交尾期が有る。然して動物は其の交尾期に際して、或は美毛を以て、或は美音を以て、彼等の雄を誘ふが通例で有るが、こゝに又馥郁たる香氣を放つて其の雄を誘ふものが有る。例へばかの麝獸の如きは其の一例證で、普通麝香と稱せらるゝものは、交尾期に於ける麝獸の或る部から分泌せる一種の液體を精製したものである。婦人の月經はつまり麝獸の遺跡でもとゞは月經の薫香が必ず男性を誘ふたに相違ない。現に西洋の或る婦人中には、其の經水が頗る香に富んで居るものもあるといふ事である。聞いて見れば一面の理由は有り、兎に角一説として此所に紹介して置く。自然界に於ける人類の位置が、何の邊にあるかを知らるゝ諸君は首肯せらるゝであらう。

又、近刊の人類學會雜誌に面白い傳説が載せてある。淫齒にも關係があるから、少し長いけれど紹介しやうならば、

越中國婦負郡野積谷地方の山村には、婦人の月經に就て面白き迷信がある。今に此の迷信が解けもせず、老媪の口から我れ物知り顔に少女へ傳へている。私も取調べたい事があつて、彼地へ行つたとき、七十歳餘りの老媪の口から、自慢らしく語つたのを聞いたのである。

婦人の胸の中に一の血の池があつて、此池に小蛇が栖て居る。此の池の血が月々に流れて下るを、女子の月の物と云ふのである。此の小蛇が女子の胸の中へ栖み込むのは、女子が十四五歳に成て、少しく春情が萌した頃である。初め小蛇が何處から來たとなく、胸の中へ栖込と共に一つの血の池が出来るのである。月の物を初めて見た頃が小蛇が栖み込だので、小蛇が栖込むと、女子に嫉妬心が起て、獨り種々な邪推を廻し、常に自分で自分が苦んでをるのである。此儘に置けば、女子の成長すると

共に小蛇も成長して、ますます嫉妬の惡念を起し、女子を生きながら大蛇に化身させて、世界の男子を一人も殘さず、取り喰ふのである。昔し昔の大昔しに、我國の慈悲の深い神様が在て、大蛇に一番毒なる物は黒鐵であるから、婦人は一生涯に黒鐵三斗六升を呑めとの詔りが降つた。其時に臣下に智慮の勝れた人があつて、鐵の儘では呑む事が出来ぬで、何とか呑む用法が無かるふかと、種々に思案して、鐵醬を作る方法を考へ出し、此の鐵醬を齒に塗りて、置けば、何時となく鐵醬液が喉を下り、胸の血の池へ入ると、小蛇は鐵に苦しめられて縮んでいるで、淫齒すると何となく心に爽快を覺へ、又含鐵醬淫齒の際、齒に塗布した鐵醬を口中に含でいるを云ふを呑込と、月の物に滯りが無いと云ふ。黒鐵三斗六升に相當する鐵醬を塗り終れば、小蛇が消えて血の池が涸て血が無くなるので、其時から婦人は月の物を見ぬことになる。十四の年に初めて、月の物を見て、四十九歳で月の物が止むので、此の間が三十六年間あります。

て、一年に一升の黒鐵を齒に塗るとして、三十六年間に三斗六升の黒鐵を呑むのである、人によりて十五六歳或は十八九歳で初めて、月の物を見る人もあるが、此の如く遅い人は、止むときも遅いので、五十二三歳又は五十六七歳までも月の物を見るのである、昔しは月の物を見ると直に涅齒するのであつたが、其後ち月の物を見る年齢が、恰も嫁入する年齢であるので、涅齒して居ると、嫁か娘か見分けるに都合が悪いので一年や二年で小蛇も成長せぬので、嫁入の後で齒を涅めても好いと云ふので、嫁に行くとき直に涅齒する事になつたのである。

(米澤安立)

(B) 服装 (浴服)

美術的浴服には四箇の要素が備はらねばならぬ。第一仕立方、第二着方、第三縞柄、第四色合。前の二は形に關し後の二は色に關する。

西洋の諺に「仕立屋は人を造る」と云ふ事が有るが、成程其の通り、少々の體格上の欠點は衣服の仕立方一つでどふても隠される。日本服の妙處は仕立方よりも寧ろ着方に存し、西洋服の妙處が着方よりも寧ろ仕立方に存すると稍々反對の有様で有るが、此は唯だ西洋との比較上の話で、日本服と雖ども其の美觀が仕立方の如何に規定せられる事は次に擧げた一例を見ても略ぼ分る。

東京の女學生式服装は此を地方のそれに比較すると著しく、スラリとして居る。是は何も東京の女學生が地方の女學生より、其の體格の上に於てスラリとして居る譯では無く、唯だ衣裳の仕立方が好いからさう見えるま

ての事。試に東京の女學生の衣裳の仕立方を觀察せんか。第一、肩行と身幅とが田舎のそれに比して狭くしてあるが爲め、肩が頗る小さく見えて腰と裾とがキチンとしまり、全體の恰好が甚だしく華奢に見える。第二、袖附が多いと胴が尨大に見えるから、此を避けむが爲めに入ッ口を極端に切り上げて袖と身頃との別を鮮明にし、以て胸腹部を繊細に見せて居る。(袖附は前より後が少くしてあるが、是は帯を高くしめむがためである)。又第三には、袖口を成る可く大きくして、袖を成る可く長くする。袖口を大きくして置く時は、手を垂れた時に袖口先が稍々後方に折れ返り、同時に長い袖が後方にはねで乳房の邊の襞を延ばし、夫れや是れやて胸部は随分細くなる。若し此と反對に袖口を小さくして袖を短くすれば、手を垂れた時袖口先は後方に折れずして左右に突き出て、又短い袖は後方にはねずして却て腋下に挿まり、爲めに胴は非常に大きくなる。第四は肩上げて、兩方の肩上げ間の距離を寄せられるだけ寄せ、其の上、上から下に至るに従ひ稍々内方に走ら

せて有るなど、是も肩幅を小さくし、軀幹を細長に、スラリと見せる効が有る。其の他にも原因は有らうが、大體右の様な仕立方がしてあるから東京の女學生式服装が、スラリとして如何にも華奢に見えるのである。

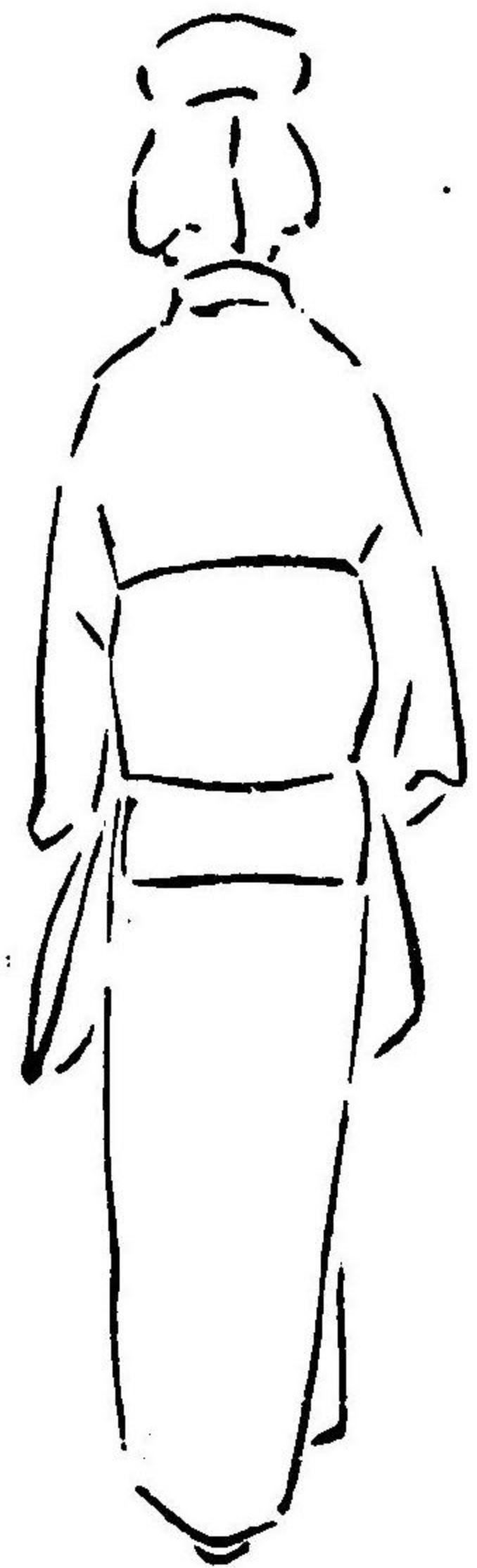
仕立方に次では着方。着方に服装の美を發揮するは最も日本服の特長とする所であるが、是れは又非常な經驗と工夫とを要する。今着方の二大難關たる、裾捌きと帯結びに就て其の一般を語らうならば。

抑々日本の婦人服には袴と言ふものが無いから、如何に裾を處分す可きかは、服装上容易ならぬ問題で有る。四季折々の中流婦人の外出服装を見るに、下帯の外、蹴出し、長縹、二枚重ね若くは三枚重ね等、少くとも裾は四重又は五重になつて居る。此の四重又は五重の裾は可なり長くして有つて、其の上ふつくりと綿が入れて有る、だから此を緩く取扱ふと少し風でも吹かうものなら、直ぐに脛の露はれる恐が有る。さらばと云ふて、裾を餘り緊く引きしめると髪飾りとの釣合を失して龍頭蛇尾の憂が有る。此の間の消

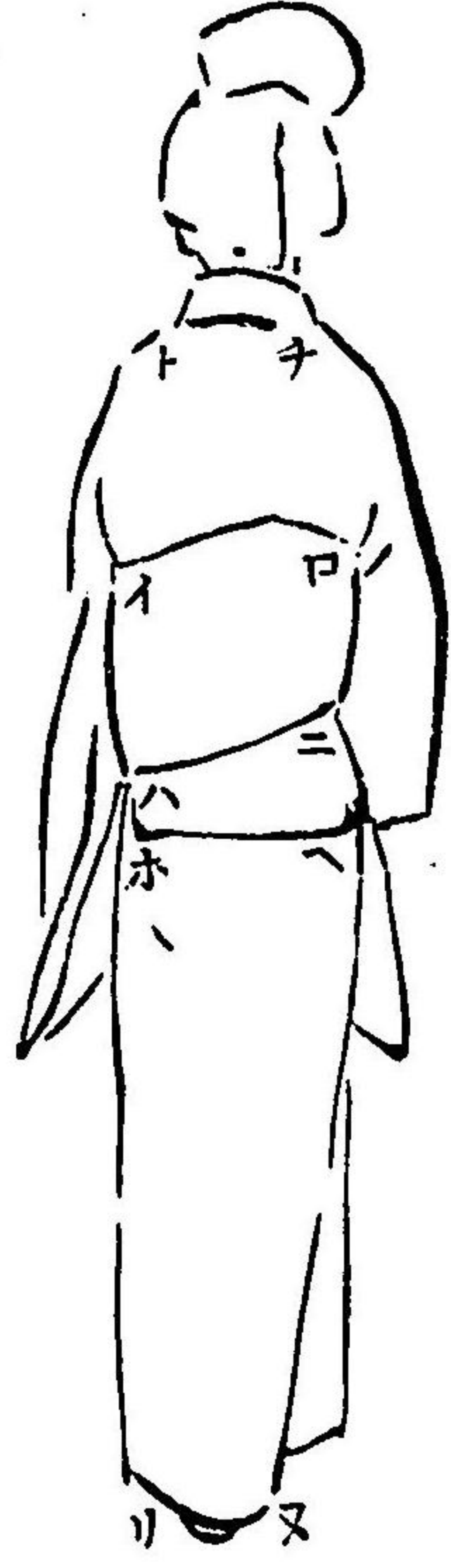
息が甚だ六ヶ敷いもので、派出やかな髪飾りと權衡が取れる様に裾を擴げ
而も白脛を露はさぬ様に此を着こなす事は蓋し服裝上の虎の巻て有らふ。
元祿頃には、蹴出しの裾に鈴の錘を入れたさうだか、此もつまり裾を捌いて
而も脛を出さぬ用意である。

次に帯の結び方は裾捌きよりも重大な事柄である。

古代の帯は繩又は紐で唯だ前のはだからぬ様に結んだのに過ぎない、且
つ大低は前に結んだ。平安朝の初桓武天皇が唐の服制を採用せられてか
らは上に衣をつけ下に裳をつけたから、帯の必要は極めて尠なかつた。故
に婦人が専ら帯を用ひたのは足利時代よりの事だ。徳川時代に入りては、
天和頃にかゝるた結が、元祿頃に「一幅帯がある。かの吉彌結、平十郎結、水木
結」などは此を創案した、役者の名を轉用したもので、何れも元祿以後のもの
である。今日普通に行はるゝは「やの字結」も「大鼓結」も「引掛結」の三種で、中
にも引掛結は普通に家居の時に結ばれる實用向のものであるから美術的結



圖八十二第



圖九十二第

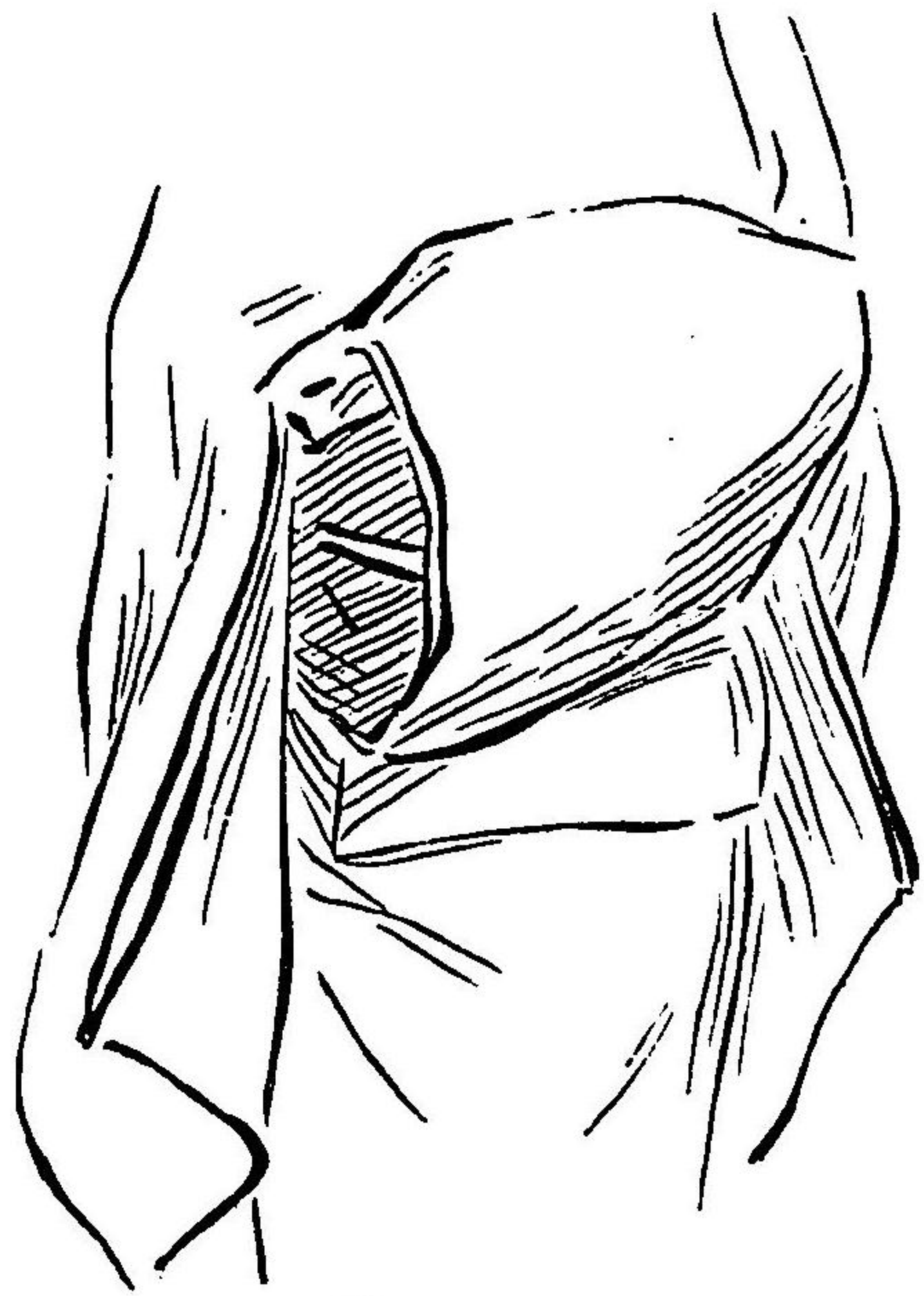
び方としては先づやの字結と太鼓結とである。

業に述べた様に、當今の婦人服には袴が無いから、背面の服装はトカク單調に失するの傾が有る。帯の役目は、無論大きな醜い臀を隠くすのにもあらうが、其れよりも重要な事は實に此の背面の單調を破るといふ事にある。而して其の單調を破るや二つの方法に依る、一は線、一は面。

少女が粗い縦縞を着ると、肩揚げの縦の線、身頃の縦縞、袖の縦縞と、背面は殆んど縦ばかりの線になる。其所へ斜に帯をやの字に結ぶと、縦の線と斜の線とが相錯綜して頗る面白味がある。又太鼓結に在つても、太鼓の上邊線と下邊線と手の線第二十九圖、イロ、ハニ、ホ（）との錯雜した三つの線が殆んど水平なる領の線と裾の線第二十九圖、トチ、リヌとの中間に横たはつて、大に變化の妙を極めて居る。近時或る社會の女中などが結ぶ第二十八圖の様な結び方は、同じ孤線が重複してちつとも變化の妙が無い、流行かは知らぬが醜の極だ。

次に帯が面の單調を救ふとは、例へばお太鼓結にあつては、帯上げ一名背負上げに依つてお太鼓の上端を脹らかし、其の下端に至るに従ひて一方は他方より稍々體に引きつけ、更に其の手を少しく外方に跳ね出さしむる等である。此うすると側面から見た時、頂の垂直面と裾の垂直面との間に、水平面、斜面、球面など面の變化が出來て至極美的だ。詳しくは第三十圖を見て了得せられんとを望む。

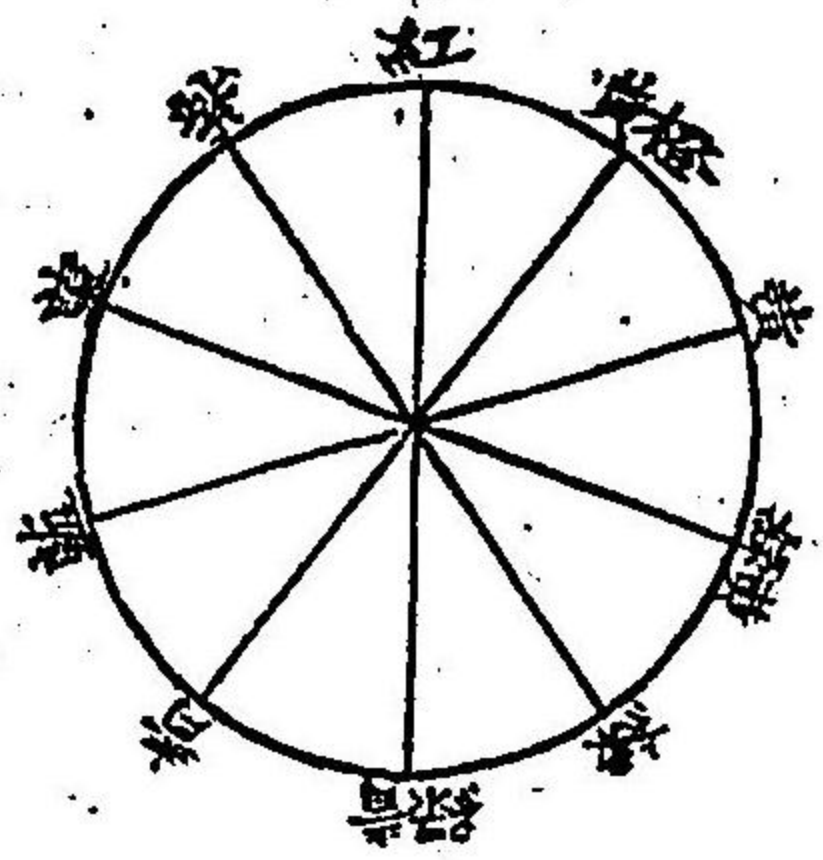
附言。 やの字結は一名路考結とも言ひ、二代目瀬川路考が發明した所で、専ら寛政の頃流行した。やの字結を眞直に結んだのは即ち縦やの字結で、徳川時代のお小姓などが此をやつた。今も尚ほ十三四の女兒には時に此を用ふる事がある。お太鼓結はやの字結に續いて文化十四年頃流行した。恰かも當時龜井戸天満宮の太鼓橋再建の折柄で、背負上げと帯との間の透いて居るのが丁度太鼓橋の様で有つたから、遂に其の名を負はせたとの事である。



第三十圖

縞柄は大小に關せず、總じて鮮明なはつきりしたものが好い。又羽織の柄は長着の柄よりも小さな方が映りが好い。羽織の柄が長着のよりも粗いのはどうも散漫に流れる。横縞が丈の高い人に似合ひ、堅縞が丈の低い人に似合ふなどは誰も承知して居る事である。

最後に色の話。今日の心理學や美學では色環と稱して諸色を圓周上に排列する。即ち左圖の様なもので、各直徑の兩端にある二色は互に調和し又互に對照する。例へば紅と青綠、橙黃と青黃と藍との如して。此等



の直徑上の二色を補色 Gegenfarben と言ひ、濃い時は對照を保ち、薄い時は調和を保つ。即ち調和と對照とは補色の濃淡に依つて分れるのである。

紅でも綠でも藍でも紫でも、凡て濃い色は壯嚴の感を伴ひ、此に反して淡い色は優麗の感を伴ふ。そこで、婦人が其の羽織と長着、上着と下着等に補色を用ゐるならば、優麗の感がある淡い補色、即ち調和を用ゐねばならぬ。若し濃い補色、即ち對照を用ゐると僧侶の法衣こころを見ただ様に威嚴のみ有つて、少しもやさしさが無い事になる。一時非常に濃い紫の被布が流行したが、女性のやさしさは頓と見え無かつた。

能の装束は調和の美を極め、間の狂言のそれは對照の妙を極めて居るやうに思ふ。しかしこれは著者の一家言である。

此く全體としては調和を尊ぶものゝ、其の一部一部には又對照があるのも好い。例へば襟、八ッ口、袴などには、強い補色を用ゐて對照の美を表はすのも至極妙、此點は京阪藝者が發達して居るやうだ。

已に調和と對照とが美で有る以上は、調和でもない對照でもない、紅と橙、黄、青と藍との如きが醜なることはいふ迄もあるまい。尙ほ美の形式としての調和及び對照に關しては第二編第一章に述べたれば今は之を略す。

調和對照の外、色には寒暖の別がある。暖色とは前の色環に於いて紅、黄を中心として一方は紫に至り、他方は黄、綠に至る間の色、寒色とは同じく前の色環に於いて青、藍を中心として一方は藍に至り、他方は綠に至る間の色。暖色は何處となく暖そふな温そふな感が有り、寒色は涼そふな冷そふな感がある。故に香水の場合と同じく、暖色は冬の衣裳に適し、寒色は夏の衣裳に適するは勿論である。

これは學術上實驗上吾人の幼稚なる觀察であるが、或る黒人筋の意見を紹介しやう。

「先づうつりのよろしいのは、青と橙色、黄と紫、紅と綠、綠と茜、紫と淡紅、朱とひわ茶、緋と綠、青、淺黄と玉子色、樺と緋、空色と靛色、茜と鶯茶、玉子色と淡紫、濃

を増やしむる實例である。詮ずる所裝飾の極致は個人的のもので、甲の婦人に佳なる裝飾が必ずしも乙の婦人には佳ては無い。裝飾に志す婦人は無闇に流行を逐はず、先づ此の點に着目し無ければならぬ。

古い話ではあるが、おつまが洗ひ髪て頸の太いのをかくし、たれかゝ手巾を捲きつけて反齒をかくし、奈翁が禿隠しに左から分けた類。

第二、長所を發揮する事。

醜婦と雖ども身體の何處かに多少の美點は必ず有る。例へば眼もとが可愛らしいとか、口もとが好いとか、肩がよく流れて居るとか、手がやさしいとか。そこで眼もとの可愛らしい婦人は化粧によりて益々其の可愛らしい眼もとを引き立てる様にせねばならぬ。

肩のよく流れて居る婦人は浴服に際して益々其の流れ肩を引き立てる様にせねばならぬ。折角の裝飾も、其の人の長所を蔽ふ様では何にもならぬ。

第三、調和を失はざる事。

凡そ裝飾の美は、髪結び様を始めとして、着物の縞柄、羽織の色合、帯の格好から傘、下駄、指輪等の附屬品に至る、全部總

體の釣合の上に存するから、三枚重ねて靴をはいたり丸鬘で袴をつけたりしては一向に美的では無い。田舎女の服装は、髪、羽織、帯、下駄と一々離して見ると左程醜い事も無いが、扱て此等を引くるめて全體として見る時ほどふも見つともない。是れは調和と云ふ事が缺けて居るからだ。上總房州の海邊では、島田の十七八が深張の蝙蝠傘で炎天を跳足て歩行してゐるではないか。

かの社^{まじ}禰なるものは固より婦人の服では無いが、女義太夫などが着ても可なり能く似合ふ。是れは人工的な結髪の曲線と、人工的な社^{まじ}の直線とが相調和するからである。又廂髪下げ髪が矢^や飛^ひ白^く袴^は靴と能く調和するのは、此等が在來の結髪、縞、下駄に比して幾分か自然的といふ共通性を有つて居るからである。西洋婦人の裸體畫は見よいが日本婦人の裸體畫は見にくいのも、一部は人工的と自然的との調和しないのに據る。何となれば西洋婦人の髪飾りは自然的で有つて、此が自然的な裸體と能く一致するが、日本

婦人の髪飾りは人工的で有つて(廂髪及び下げ髪は此限りにあらず)どうも自然的な裸體と一致しないからである。

第四、季節に従ふ事。生花や掛物や置物が季節に依つて變る如く、人體の裝飾も春夏秋冬で違はねばならぬ。前に言つた暖香暖色を冬季に用ゐ、寒香寒色を夏季に用ふるなどは是れ其の實例。簪の花、模様の花鳥動物まで季節につれて夫々のものを用ふると言ふのはチト凝り過ぎかも知らぬが、又此の邊の消息を窺ふに足るては無いか。

* * * * *

業に題目にも示した如く、修容(化粧)や浴服(服装)は、人體美を助成するに止る而已で、敢て人體美其のものでは無い。故に、醜婦が如何ほど美的に化粧しても、如何ほど美的に服装しても、それて直ちに美人となれる譯のものでは無い。唯だ是れに依つて幾分か其の醜を隠蔽することが出来るのみだ。ソロモンの榮華も一莖の野花に追はぬ如く、げに人工の美は天然の美に若

かぬので有る。天成の麗質は敢て修容浴服を要せぬ、否な修容浴服は時として天成の麗質を毀損する事が有る。

爰に弘農の楊玄瑛が女に楊貴妃といふ美人あり。是は其の母並寢して、楊の陰にねたりけるに、枝より餘る下露、婢子にちちかりて胎内に宿りしかば、更々人間の類にてはあるべからず。只天人の化して此の土に來るものなる可し。紅顏翠黛は元來天のなせる質なれば、何ぞ必ずしも瓊粉金膏の假なる色を事とせん。

(太平記)

姫はことし二十に満たず。客顔固より玉をあざむく。巫山の山神が雲となりし夢の面影を留め、小野小町が花に比べし歌の風情を殘せり。金屋の内、鶏障の下に、やしなはれ給ひし日は、更にも言はず。今山居久しうなりて、衣裳は垢つき破れたれど、肌膚は殘の雪より皓く、ろさかみ梳るに由なけれども、緑の鬢春の花より芳し。

(馬琴)

魏國夫人承主恩、 平明騎馬入金門、

却嫌[◎]脂粉[◎]汚[◎]顔色[◎]、

淡掃[◎]蛾眉[◎]朝[◎]至[◎]尊[◎]、

(張翥)

無粉無脂、更に妝飾の巧を施さずとも、天賦の體美は尙ほ能く楚々として人を動かすのである。是を以て觀れば、妝飾に凝るは醜婦の事、美人は妝飾以外に立ちても尙ほ能く圓滿なる美人たり得る事が出来る。否、妝飾を控除しても美人なのこそは真正の美人であらう。

第三章 光線

光線の色及び方向は又人體の美醜と大なる關係を有する。

一言にして謂へば、青色を帯びた光線は人體美を助け、黄色を帯びた光線は人體美を損する。弧燈^{アークライト}、瓦斯^{ガス}、月光の如きは前者で、白熱燈^{インカンデセントランプ}、洋燈^{ランプ}、蠟燭の如きは後者。

月の光が人體を美ならしむるの例は殊に夏の夕て有る。新浴まさに畢つて白衣の女三五江畔に納涼すれば、玉兔團々として東天に懸る。涼風は袂を弄んでひらく、月光は銀鈿に映じてきらく。此の時髪は闇の如く黒く、顔は雪よりも白し。如何なる醜婦も殆んど天使の様に美しく見えるのは是れ此の瞬間である。蕪村は曰く、

四五人に月落ちかゝる踊哉

と、野夫村娘も白う更け行く晩夏の月には如何ばかり美しう見える事て有らうぞ。

かすむ夜の袖寒からぬ春風に

立出て、見れば月ふけにけり

文雄

夏の夜はさぬうとましましき闇の中を

はしたなさまて月のさしとふ

翁満

櫻の蔭を月に憧るゝの美人、寝衣姿を月に照らさるゝの美人、美ならざるは無く艶ならざるは無してある。更に、

琵琶を抱く月満面の美人かな

大江九

に至つては、いふまでもなく琵琶行一幅の好書圖で、美にして且つ壯なるものである。若しそれ次に掲ぐる二詩の如きは、夕月の美人と朝暎の美人と

が其の美を發揮するの差違を能く現はして居るては無いか。

温泉寺畔晚鐘殘、 出洛豊肌汗未乾、

銀管吹煙香馥郁、 青山影裡倚欄干、

船山

何處佳人婀娜裝、 青山初日照流黃、

輕羅半掩金跳脫、 春寺燒香透畫廊、

金大轡

落暉西山に沈むの頃新浴正に終りて悠然うばしまに倚るの美人と、新陽金輪を轉ずるの時盛裝を凝らして流黃を焔くの美人とは讀者果して孰れをかより美なりとはせらるゝ？

次に瓦斯やアークライトが人體美を助けるのは劇場や夜會。中にも洋風の宴會で、純白のテーブル掛けが淡青き瓦斯に照らされる所、其所に盛裝した紳士淑女が相集ふと、此の淡青い瓦斯の光と眞白なテーブル掛けとの

反映作用で、清らかな透き通つた、何とも謂へぬ一種の美観が現はれて来る。此に反して赤黄色を帯びた光線には決して以上の様な美観は伴は無い。例へば白熱燈でも洋燈でも又蠟燭でも、此等の光線に遭ふと、眞白な白粉も眞白な浴衣も、何だかうす黒く濁つてイヤニさたなく見える。瓦斯を引いた料理屋の女中と、白熱燈又は洋燈を點た料理屋の女中とは其の美しさが二段も三段も違ふ様なは、吾々が屢々経験する所て有る。かの有明行燈や盃蘭盆の提灯に凡て淡青色を用い、以て醜なる蠟燭の光を美化したのは、又這理の理由から割り出したので有らうと思はれる。

と論じたてると、京の料亭では今も蠟燭ばかりではないか、大阪などは瓦斯や電氣も十分十二分に便利で、しかも實利一點張の土地でありながら、藝子や舞子の座敷は蠟燭ではないか。との反對説が出やうが、これは光線が美を増すからではない、儘に他の理由からである、著者不敏未だ之を知らずてはあるが、蠟燭といふものゝ連想が甚だ雅である、即ち多くの歴史を持つ

て居ると。光線が不十分であるが爲に美人は勿論あたりの裝飾も調度も一種靄然として餘情がある(一方からいへばゴマカシがさく)それからも一つはちと穿ち過ぎるかも知れぬが、電氣では點燈料も取れぬが蠟燭代はなかくの収入になる。まだ其外にも一つ二つはあるが、天機を漏らすの恐れがあるから止めやう。

二八 如廻雪 三春類早花
分行向燭轉 一種逐風斜 楊師道

仙漏遅々出建章 宮簾不動透清光
金閣露白新裁詔 畫閣春紅正試妝
淚滴杯盤何所恨 燈飄蘭麝暗和香
多情更有分明處 照得歌塵下燕梁 鄭谷

繪畫に陰翳法が大切て有る如く、人體美にも光線の方が肝要て有る。

光線が頂上から射來つて美で無い事は、正午前後に於ける街道の婦人を觀るとすぐ分る。頂上から來ず、斜めに來るにしても、眞正面マシヨウメン若くは眞背マシヤクから來ては美でない。それは、こんな方向から光線を探つた寫眞を觀ると能く分る。然らばどんな方向から光線を引くが美かと言ふに、大抵は、

右上の後ウシヨ

左上の後ウシヨ

右上の前

左上の前

の四方向が好い様である。男女老幼に限らず、燈火に對しても日光に對しても、此の四方向の事を心得て坐を占めると頗る見格好がよい。洋畫の採光が一般に左上の後なるも亦此の理由に基づくのである。著者が知る範圍では、京の藝子や舞子が最も巧みに光線を利用するやうだ。

第四章 配景

佛畫に厨子の必要なるが如く、佛像に須彌壇の必要なるが如く、將又建物に植込泉水の必要なるが如く、人體の美も其の四圍の調度景物と相俟つて愈々其の美を發揮するのである。此を人體美の配景とは謂ふ。

人體美の配景は調和と對照との二面から觀察するが便利だ。しとやかな美人に花や蝶をあしらひ、荒くれた武夫ムウに激風怒濤を點ずるは是れ調和的配景。此に反して、義家が勿來關に櫻を詠じ、巴が甲冑を纏うて戰場に臨むなどは對照的配景。柔に配するに柔を以てし剛に配するに剛を以てするは前者にして、柔に剛を配し剛に柔を配するは後者である。

調和的配景には自然のものとな人工的のものとがある。前に謂ふた美人に花や蝶を配し、又高士逸人に深山幽林を配するのは自然の調和で有つて、金殿玉樓に佳人を配し銀鞍白馬に貴公子を配するのは是れ人工的の調

和て有る。かの『越王勾踐吳を破つて歸る義士家に還つて盡く錦衣宮女
花の如く春殿に満つ』とは誠に人工的背景の調和を能く表はして居るて
は無いか。

著者が或る圖案の大家から聞いた。彼の遊廓では襖に極彩色の帯模様
を附ける、それが丁度遊女が座した時の顔の背景になるのださうな。

對照的配景にも亦自然的のものと人工的のものがある。魏の曹操軍
を率ゐて赤壁を下るや、偶々『月明かに星稀に、烏鵲南に飛んで繞樹三匝す』
彼れ此の風光に感慨措く能はず、戎衣の袖を拂ひつゝ、槊を横たへて徐に詩
を賦す。是れ對照的の自然配景である。其の他、謙信が『霜は軍營に滿ち
秋氣清し、數行の過雁月三更』と謠ひたる、梶原景季が箴に梅花を挿んで戰
ひたるなど、皆此の種の對照である。日本の美人畫殊に浮世繪の如きは、大
抵自然と人體との調和美を畫いて居るが、西洋の裸體畫には自然と人體と
の對照美を畫いて居るものが多い。

人體美論終

若しそれ嬌々たる美人が多數の髯武者男子と立並んで、又は妙齡の少女がみつはぐむ老媪連中と居並んで、其の女性美を引き立たしめるのは、是れ即ち人工的配景の對照美で有る『萬綠叢中紅一點』とは蓋し此の邊の消息でなあらうか。

付與論與體人

製複許不

錢拾貳圓壹金價定

刷印日七十月三年一十四治明
行發日十二月三年一十四治明

著者

川崎安

發行者

平山勝熊
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發兌元

東京市京橋區南鍋町一丁目
株式會社 隆文館
振替貯金口座八五三番

付與論英體人

製複許不

錢拾貳圓壹金價定

刷印日七十月三年一十四治明
行發日十二月三年一十四治明

著者

川崎安

發行者

平山勝熊
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發兌元

東京市京橋區南鍋町一丁目
株式會社 隆文館

振替貯金口座八五三番



東京美術
學校教授
岡田三郎助先生校閱
川崎
安先生新著

定價金九拾五錢
小包料金拾錢

再改訂
人體畫法

天に星、地に花、中に位し、妍を争はん、と人體の美に非彼の洋畫が人體畫を以て其の根底となすも、ありと謂ふべき繪畫の事には先づ人體の研究にて悉しうし、堂奥に上るの準備となす。本書は川崎安先生、多年の蘊蓄を傾け、盡して著したるものな、更に現今洋畫界の泰斗たる東京美術學校教授、岡田三郎助先生が歸朝以來、中等教員木炭畫指導に於ける數回の經驗がみ、正周密的校閲の勞を賜はり、たゞ以て學畫の入門とせず、以て畫界の津梁となす。藝術に志ある者は必ず讀まざるべからず。

製本金縁表紙包紙意匠
新本文船來紙印刷繪畫
考名畫說明書數十葉挿入

哲 學 宗 教 書 類

隆文館發行圖書總目錄

朝永三十郎先生著	哲學と人生	定價 金壹圓 小包 金八錢
加藤玄智先生著	宗教講話	定價 金九拾錢 小包 金八錢
釋雲 照 律師著	予が信仰	定價 金五拾五錢 小包 金八錢
桑木嚴翼先生著	時代と哲學	定價 金壹圓貳拾錢 小包 金拾錢
黒岩涙香先生著	精力主義	定價 金四拾八錢 郵稅 金八錢
シヨツベンハウエル著 角田浩々君譯	戀愛と藝術と天才	定價 金六拾五錢 郵稅 金六錢
マックスノルダウ著 桐生悠々君譯	現代文明批判	定價 金六拾五錢 郵稅 金六錢
トルストイ著 小田頼造君譯	人道主義	定價 金九拾五錢 小包 金拾錢
鈴木天眼先生著	神物人感應如是	定價 金八拾錢 郵稅 金八錢

教 育 參 考 書 類

浮田和民先生著

倫理的帝國主義 (近)

刊

坪井正五郎先生著

婦人と小兒

定價金八拾錢
郵税金八錢

井上哲次郎先生著

武士道論考 (近)

刊

大島居弁三先生著

世界諸人種

定價金六拾錢
小包金八錢

矢津昌永先生
小平高明先生
角田政治先生 共著

大日本地理集成

定價金壹圓八拾錢
小包料金拾六錢

史學部編纂

日本史要 (上下)

定價金壹圓拾錢
郵税金拾錢

豐崎善之介君著

路透電報翻譯法

定價金六拾錢
郵税金六錢

岡田三郎助君
川崎安君著

人體畫法

定價金九拾五錢
郵税金拾錢

小澤鹿十郎君著

小兒のそだてかた

定價金參拾五錢
郵税金四錢

社會研究會編纂

日本社會年鑑

定價金貳圓五拾錢
郵税金拾六錢

教 育 參 考 書 類

幸徳秋水君 石川三四郎君著	矢野、山内、不破 三文學士合著	岩崎理學士、角田 有田兩教諭合著	可兒徳君、武田 文三郎君著	山崎今朝彌君著	報徳會編纂	竹越與三郎君著	大町桂月君著	山路愛山君著	米田勝藏君著
日本社會主義史	中等國史辭典	阿蘇山の地學的研究	學校遊戲の理論及實際	粗食養生論	報徳の研究	三又文集	桂月文集	愛山文集	處生眞訓
(近刊)	(近刊)	定價八拾五錢 郵稅金八錢	定價六拾五錢 郵稅金六錢	定價貳拾五錢 郵稅金四錢	定價六拾八錢 郵稅金八錢	定價四拾五錢 郵稅金六錢	(近刊)	(近刊)	定價四拾六錢 郵稅金六錢

家 庭 園 藝 書 類

成女學校附添部立案 陳文館編輯局編纂	庭 家	料用家	庭 曆	定價金參拾五錢 郵稅金六
巖谷小波君著	家	と	女	定價金七拾五錢 郵稅金八
幡幽泉君著	細君のため			定價金四拾五錢 郵稅金六
棚橋紬子女史著 嘉悦孝子女史著	日用家事讀本			上卷定價五拾八錢 下卷定價六拾錢
平山英治君著	女子衛生訓			定價金四拾五錢 郵稅金六
三島霜川君合著 岡鬼太郎君合著	軍人の家庭			定價金拾八錢 郵稅金四
富益良一君合著 田中萬逸君合著	草花栽培全書			定價金六拾五錢 郵稅金六
小野藻波君著	益裁法秘訣			定價金參拾五錢 郵稅金四
嘉悦孝子女史著 井上善兵衛君著	割烹新書			定價金八拾錢 郵稅金八
鹽見平之助君著	フランクリン女性觀			定價金貳拾五錢 郵稅金四

文藝書類

無名氏選	草村北星君著	平福山花穂君著	宮田山花汀君著	上合浪雄君著	落合浪雄君著	梶藤半古君著	伊藤銀月君著	中里介山君著	久保田金徳君著	久保田金徳君著	幸徳秋水君著	伊藤銀月君著
萬朝一口噺	クリスマスお伽噺	旅すかた	草枕	七日物語	田園生活	今人古	美威新論	平民主義	海國日本			
定價金貳拾錢	定價金四拾八錢	定價金六拾錢	定價金六拾錢	定價金四拾八錢	定價金五拾錢	定價金四拾錢	定價金七拾五錢	定價金五拾錢	定價金六拾五錢			

(發賣禁止)

文藝書類

伊藤銀月君著

闇黑日本史

定價金六拾錢
郵稅金八錢

伊藤銀月君著

大日本民族史

定價金六拾五錢
郵稅金八錢

伊藤銀月君著

日本海賊史

定價金五拾錢
郵稅金八錢

伊藤銀月君著

世界女性史

定價金六拾錢
郵稅金八錢

伊藤銀月君著

世界古文新釋

定價金七拾五錢
郵稅金八錢

伊藤銀月君著

當世一百人(三冊)

定價各貳拾錢
郵稅各四錢

久保天隨君著

三國志演義

定價金七拾五錢
郵稅金八錢

久保天隨君著

李杜評釋

定價金七拾五錢
郵稅金八錢

室直哉君著

和漢名詩評釋

定價金貳拾五錢
郵稅金四錢

茅原華山君著

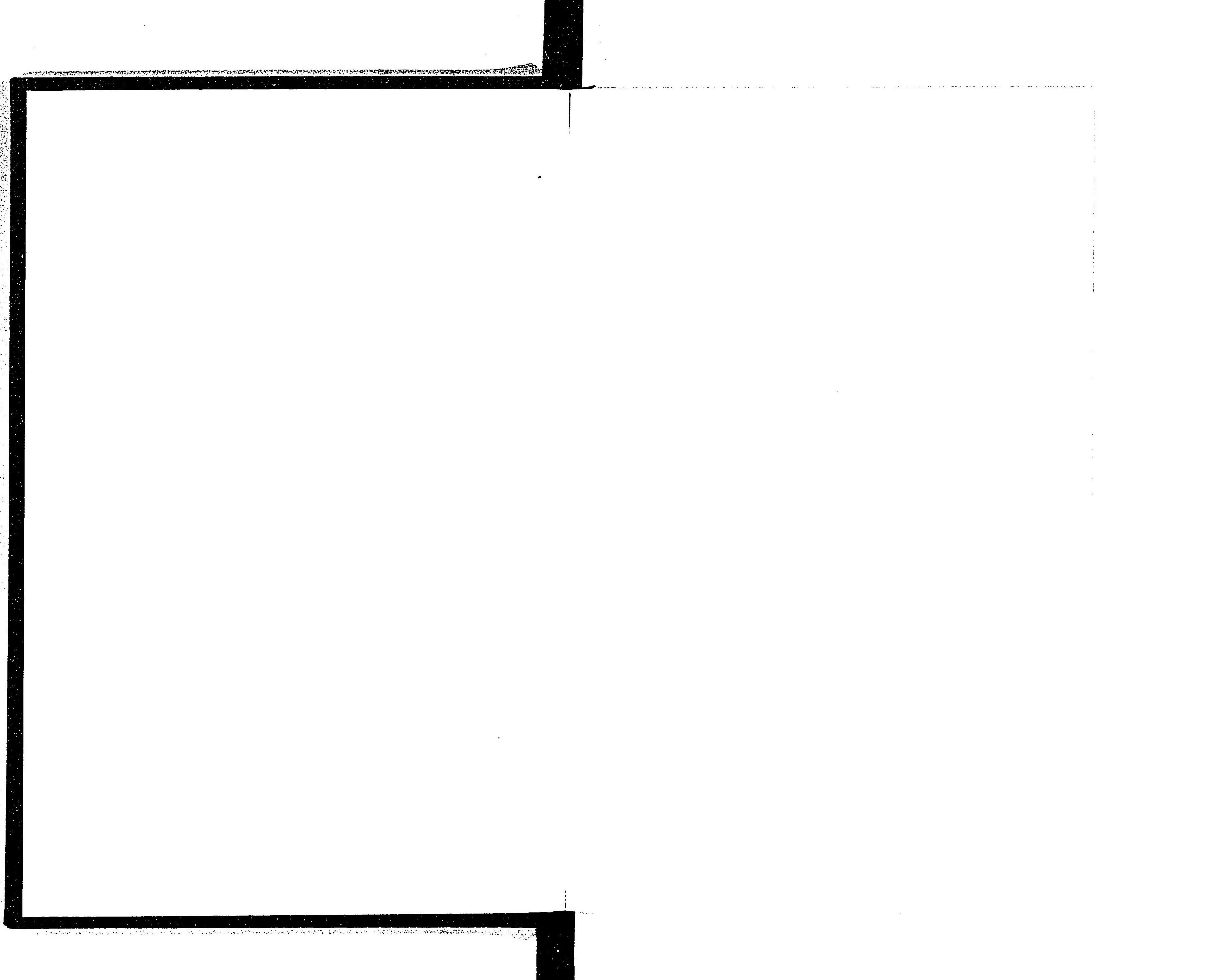
左右修竹

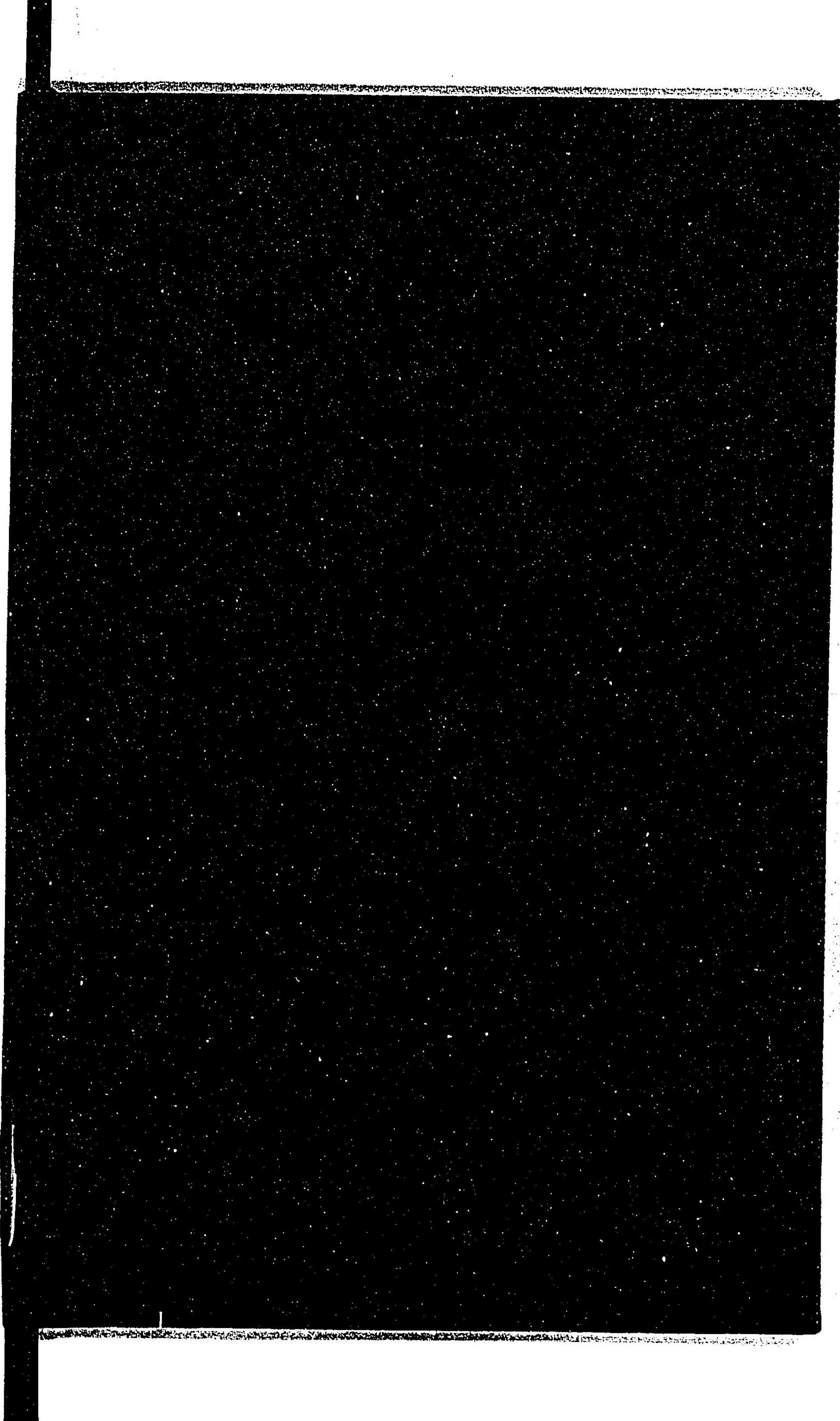
定價金五拾錢
郵稅金八錢

エトセ-52

文 藝 書 類

見玉花外君著	横瀬夜雨君著	夏目漱石君序	田山花袋君譯	坪内逍遙君手簡	片山天絃君譯	丸山晚霞君畫	小島烏水君著	三宅克巳君畫	幸徳秋水君譯	吉川曾水君著	國府犀東君合著	平福百穂君合著
ゆ	花	ウオルツチオスの詩	キイツの詩	テニソンの詩	山水無盡藏	日本山水論	神愁鬼哭	ナポレオン三世	富士	周		
郵税金四拾五錢	郵税金四拾五錢	郵税金四拾五錢	郵税金五拾六錢	郵税金五拾六錢	郵税金七拾五錢	郵税金八拾錢	郵税金四拾錢	郵税金四拾錢	郵税金五拾八錢	定價金壹圓五拾錢	定價金壹圓五拾錢	小包料金拾貳錢





63
66

M

069295-000-9

63-66

人体美論

川崎 安/著

M41

CEA-0139



